

通常学級における障害児支援・配慮の現状と課題

—成人障害当事者に対する懐古的分析をもとに—

○長谷川 大也
(筑波大学大学院人間総合科学研究科)
KEY WORDS: 通常学級 支援 配慮 当事者 本人主体

米田 宏樹
(筑波大学人間系)

I. 目的

通常学級で学ぶ障害のある児童生徒にとって、支援は日常生活を送るうえで欠かせないものである。教員や支援員から受ける支援、同級生から受ける支援、あらゆる機器を利用した支援、学びやすい環境を作るための整備や補助などさまざまな支援がある。支援や配慮を提供する際には、「本人主体」であることが重要であり（鈴木・阿部・小曾根・柘植, 2018）、支援を提供するプロセスの中で、学校と本人の建設的対話が求められるが、実際には、教員や保護者、支援者が児童生徒に必要な支援を考えており、本人の声があまり反映されていないという現状がある（Mortier, Desimpel, Schauer, & Hove, 2010）。海外では、教育現場における障害児支援・配慮について、本人の願いや想いを尊重した障害当事者重視の研究がみられる。そこで、本研究では障害当事者の視点から、初等中等教育段階における通常学級での障害児支援・配慮の現状と課題を明らかにすることを目的とした。

なお、本研究は筑波大学人間系研究倫理委員会の承認を受けた（筑 2020-41 A）。

II. 方法

1. 対象者選定のための予備的質問紙調査（以下、予備調査）

対象者の選定とインタビューガイド作成のための資料とすることを目的とし、Z大学の障害のある学生の教育経験と今まで受けてきた支援や配慮の大まかな内容を把握するための質問紙調査を実施した。対象は、2020年6月時点で障害学生支援センターを利用していた障害学生、約130名である。

2. 半構造化面接による聞き取り調査（以下、聞き取り調査）

障害のある大学生に学校教育段階で受けてきた支援や配慮の内容、自身で工夫して対処していた内容、それに対する自身の考え、周囲の反応などをより詳細に聞き取った。対象は、予備調査をもとに選定した6名であり、2020年8～9月に、Microsoft Teams のビデオ通話を用いて実施した。分析は、Schauer, Hove, Mortier, and Loots. (2009) や高田屋・武田 (2010)、渡邊・前川 (2011) を参考にした。テキストを意味上のまとまりで区切って切片化し、内容を要約したうえで、カテゴリーごとに整理してさらに要約を行った。

III. 結果

予備調査は10名から回答があったが、その中から6名を聞き取り調査の対象者として選定した（Table 1）。

Table 1 対象者の属性

	C	D	F	G	H	I
年齢	21	56	21	19	19	22
障害種	聴覚障害	聴覚障害	視覚障害	聴覚障害	肢体不自由	視覚障害
小学校段階	通常学級	通常学級	通常学級	特別支援学校	通常学級	通常学級
中学校段階	通常学級	通常学級	通常学級	特別支援学校	通常学級	特別支援学校
高等学校段階	通常学級	通常学級	通常学級	特別支援学校	通常学級	特別支援学校

初等中等教育を終えた成人障害当事者が感じる障害児支援・配慮の実態や課題として、予備調査の回答を参考にして、授業・学習場面、授業・学習場面以外の学校生活全般、人間関係、障害受容、就学・進学との5つの場面を設定して聞き取り調査を行った。授業・学習場面は学校生活の中心となることから、すべての対象者が何らかの支援や配慮を受けていた。理科、英語、音楽、体育における授業内容の一部変更・調整

および授業を受けるうえでの配慮や、多くの授業に共通している配慮（たとえば、視覚障害では、黒板に書く文字を読みながら書いてもらう、聴覚障害では、口元をはっきり見せるなど）、教室内での座席位置や定期試験での配慮などがあげられた。一方で、休み時間や給食の時間といった授業・学習場面以外の場面は、教員や支援者からは見えにくい時間となり、支援や配慮が見過ごされがちになっている現状が確認できた。また、自分の障害をどのようにとらえているのかといった自身の障害受容が、支援や配慮を受けるといった気持ちに大きな影響を及ぼしていた。C, D, F のように、学校生活を送るうえで困ったことがあっても、「自分で何とかできる」児童生徒の場合には、障害をあまり意識せずに生活していた。そのため、通常学級の中で支援や配慮を受けることに抵抗を感じている事例があった。一方で、G や I は自身の障害を前向きにとらえており、抵抗を感じずに支援や配慮を受けたり、教員に積極的に相談したりする様子がみられた。さらに、友人や教員は学校生活を送るうえで助けとなり、重要な存在としてとらえられていた。就学・進学場面については、本人が主体的に学校選択。決定をしており、必要に応じて教員や保護者に相談している様子であった。

IV. 考察

本研究では、障害のある児童生徒の支援や配慮を考える際に、支援を受ける側である児童生徒の声があまり反映されていないことを問題の所在の一つとして掲げたが、今回はいずれの対象者においても、本人の願いや想いが無視されるようなことはなかった。本人との話し合いの場が設けられたり、本人が相談したり質問したりすれば、その意向を十分に反映して支援や配慮が提供されたりしていた。とくに、就学・進学場面においては、大人たちは本人の意向を最大限に尊重し、応援してくれていた。そのうえで、通常学級での支援や配慮においては、「自分で何とかできる」児童生徒への教員側からのアプローチ、授業以外での学校生活場面全般における支援や配慮、教員とのかかわり、障害のある児童生徒自身の障害受容、障害のある児童生徒の主体性の尊重の5点が重要であることが分かった。

一方で、今回の対象者はZ大学というきわめて偏りのある集団であったうえに、聞き取り調査の回答には一定の経験が必要であったため、限定的な結果になったと考えられる。支援を受ける本人の願いや想いを尊重した当事者重視の支援はとくに知的障害のある児童生徒において重要なことであり（松本・須川, 2014）、今後は知的障害のある人に語ってもらい、本人主体の支援や配慮について包括的に検討していきたいと思う。

(主要引用文献)

Kathleen Mortier, Lore Desimpel, Elisabeth De Schauer, & GeertVan Hove (2011) I want support, not comments :children's perspectives on supports in their life, *Disability & Society*, 26 (2), 207-221.

鈴木紀理子・阿部崇・小曾根和子・柘植雅義 (2018) 意思の推察と本人・保護者との対話を含む意思決定支援を基盤とした合理的配慮の提供—重度知的障害児への合理的配慮が本人主体であるために—, *筑波大学特別支援教育研究*, 12, 51-64.

(Hiroya HASEGAWA, Hiroki YONEDA)